

皮膚呼吸

根岸大輔

関節を覆う皮が細かい動作によって引っ張られる

夏のシャツのささやかな汗の膜の下で

やっとのことで息をしている

最前線の臓器、右ひじの皮膚。

虫の息ならまだ気づけるものの

耳をそばだててもわからない

呼吸がしづらくても

皮のうねりが息づかいを届ける

胞子が研究室に掬い

実験器具の散乱する実験室に散る

保存中の和洋折衷の建造物、何かの記念館。

アルマイトの弁当箱のようにそつと鎮座する教室

繰り広げられていた体罰の音は

柱が記憶していると思わせる懐古主義

突然

レコードがなくように響いた

スポーツポルノの夏に

スポーツ飲料の広告が

青だからって青春を彩るように見せかける

駅のポスター

そこからにじみ出ている

「爽快感」で彩られた軽さの違和感の行先は何処、めぐる。

めくる時刻表から

印象の森を探ってみても

何も誰も答えやしない

くっついていっていると思ったら

今にも離れるかのような流水

で覆われている

皮膚たち

埋められたミクロの追憶

を果てしなく弱く

唇から発される

呼吸から聞く